

今日に至っている。来年度に建て替えると言っても財源的に難しいと思われる。現在の基金の額は、また本庁舎建て替への基金設置をどのように考えているのか。

岩崎町長

現在のすべての基金の

総額は、約31億4千100万円である。役場本庁舎は防災上の拠点でもあり、建て替えは必要であると思っている。財源については、公共施設の建設を目的とした総合的な基金設置条例を現在検討している。

一般質問
休校校舎の有効利用を早急に

問 休校校舎の有効利用の考えは
答 利活用について仕分を行っている

都築正光議員

先般、教育民生常任委員会では休校校舎を活用し、地域の活性化を図っている四万十市西土佐の(社)西土佐環境・文化センター一四万十楽舎へ視察を行った。築6年後にして休校となった小学校を活用し、宿泊施設を完備した力ヌーなどの体験を通じて都市と山村との交流拠点と位置付け運営を行っている。夏期が主体で、天候に左右されるなど経営状況は決してよくない

が、職員は前向きに努力をしており、休校校舎の有効活用の事例として参考になったところである。本町では、現在6校の休校校舎があるが教育委員会として、今後どうするのか。

吉松教育長

今後、教育委員会では教育施設として存続させるのか、老朽化した校舎は廃校とし、町執行部で普通財産として利活用を検討してもらうかについて



穴内小学校（休校）

仕分をしている最中である。

都築正光議員

私が議員になって16年目になるが、それ以前から休校になっていく学校がある。少子高齢化がますます進行する中、児童数の増加が見込めない地域にある休校校舎は、廃

岩崎町長

今までも検討をしないわけではない。今後とも積極的に取り組む。

岩崎町長

町外の方との交流という視点でお客さんを迎えることにより、来た人にゆとりを感じ元気になっていただこう、迎える我々も元気をいただき地域を元気にし、ゆとりの感じられる地域づくりを進めていくことである。今までは単発的なイベントに取り組んできたが、旅行商品として販売できる状況まで持っていくことを目標としている。そのため交流班を設置し、アドバイザーを迎えて取り組んでいる。

岩崎町長

モニターツアーを通じて、地元の方や実際に交流事業に携っている方々に参加していただき組織として育てていきたいと考えている。

藤丸高德議員

大豊町総合計画「ゆとりすとカントリーおおとよ」の中に観光という文字がない。日本一大杉に3万2千人強、ラフティングに6万5千人強、そ

一般質問
農地等の情報は

問 耕作放棄地を利用して、観光農園に取り組む考えはないか
答 交流事業の中で考えていく

藤丸高德議員

第41回3月定例会において空き家、農地に関する情報の質問を行ったが、その後の農業への就労希望者や農地についての情報等を聞く。



門脇 農業委員会会長

耕作放棄地の活用は平成20年度に1件、平成22年度に2件の合計3件活用されている、本年度耕作放棄地の調査として、

岩崎町長

他の観光地を含めると十数万人の方が大豊町を訪れているが、本町における観光の位置づけは。

岩崎町長

観光という文字がないということだが、今目指している交流は観光も含めて考えており、地域住民の視点から見た交流という言葉を使っており、将来に向けての「環境と交流」からの挑戦における大きな取組である。

藤丸高德議員

耕作放棄地は便利の悪い所に多くあるが、便利の良い所の休耕地を地域交流アドバイザーのアドバイスを受けながら観光農園として取り組む考えはないか。

門脇農業委員会会長

現在農地パトロール月間で調査をしており、その調査結果を整理をし、情報提供していきたいと思っている。その中で観光農園についても考える。

藤丸高德議員

農地は先祖代々守ってきた大事な土地である。近年農業に関心のある人たちが増加している。今

地域交流アドバイザーの取組状況は

問 交流事業の方向性は
答 商品として成り立つ交流事業に取り組んでいく



藤丸高德 議員

現在地域交流アドバイザーはどのような活動を行っているのか、半年が

経過したが、方向性がまだ見えてこないように思われる。交流の拠点はどこか、交流推進のための戦略会議とはどのような組織か、交流は町内での交流かそれとも町外も含むのか。



あけぼの会収穫祭



耕作放棄地

後、新規就農者が耕作放棄地を開墾し、農業を営むにはある程度の支援も必要ではないか。

岩崎町長

農地を守るということが地域を守る上で大きな取組であり、大豊で農業をしたいという方については今まで同様、今後も積極的に支援していく。

藤丸高德議員

現在農業委員会は耕作放棄地について調査中とのことであるが、野菜な

岩崎町長

どを栽培してみたいという都市部の人たちに、観光農園として取り組むつもりはないか。

交流という視点で山村の営みということを考えれば、例えば春来て種をまいて夏に収穫に来ることがまさに地域の営みを感じていただくことにつながると思っており、提案のあった内容については、今後必要と思っております、交流事業の取組の中で考えていく。